
未来の約束

ハル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来の約束

【Nコード】

N3655BA

【作者名】

ハル

【あらすじ】

両親と叔父が海外転勤。残されたお互いの子供は一緒に住むことに。だが、この時はまだ知らなかった。相手が超絶美少女の従兄妹だったとは。そして始まる同棲生活。学校と日常での慌ただしい日々。昔の約束、初恋の人には出会えるのか。ラブコメ系は始めて書くので、ところどころおかしいと思います。

同居人は女の子

高校に進学する前の中3の12月。

俺の父親は海外に転勤になった。

なんでも、アメリカに進出するに当たって、しばらくは自分で見たらしい。

そして、母親は父親の方が心配だからと付いて行ってしまった。

まったく、子供が15歳だったのに、未だにバカップルやってるんだから困りものだ。

で、高校は日本の方がいいだろう。とのことで、俺は1人で家に残ってたりする。

念願の一人暮らし。

響きはいいが、実際にやってみると大変なことこの上ない。

まず料理。

今は料理も好きになってきたのでいいが、最初は何度も物体Xを作り続けたもんだ。

続いて洗濯。

これはネットで見たらすぐ出来たので問題はない。
知恵袋って素晴らしい！

最後に掃除。

これが一番面倒だった。

広い一軒家を一人で掃除するのは、予想以上にハードだ。

だって、今日はまだ見ぬ同居人が来るのだから。

ピンポン

セールス、回覧板、宅配でなかったら、今日来る予定の人物はただ一人。

「今日からお世話になります。久喜月夜くきつぐよです」

そう。従兄妹が家に来るのだ。

遊びにではない。

従兄妹の子も両親が海外に転勤だからだ。

まあ、俺の父親が経営する会社で働いているから、一緒にアメリカに行くからとのこと。

それで、お互いの子供が高校は日本がいい、と主張したのもあつてか一緒に住むなら残っていい、となつたのだつた。

相手の両親は4月にアメリカに発つたらしいが。

「えーっと、……女の子？」

今日から一緒に住むのが女の子だとは聞いていない。
10年以上も会っていないので覚えていなかったが、今日からどうすればいいんだ……。

「そうだけど？」

いたって冷静な彼女を見ると、慌ててる自分が馬鹿みたいに思えてくる。

だが、彼女を見て、今日から同棲となれば慌てない方が可笑しいと思う。

彼女は胸ぐらいまである茶髪に、大きな二重の目に、整った目鼻立ちに、それに色白の綺麗な肌。

彼女の第一印象は、こんな巨乳美人は実在するのか！ってことだ。

「一緒に住むのが、男だって知ってたのか？」

「従兄妹って聞いてたから、知ってたよ」

あつ美人な上に、声まで綺麗だ。
って、今はそんな場合じゃない。

「リビングで適当に寛いで、用事ができたから」

そう言つて、すぐさま国際電話。
時差？気にするな。

2コールで出て、男の声の聞こえる。

「あつ、もしもし。父さん？」

『どうしたんだ？急に。いくら月夜ちゃんが可愛いからって、いきなり結婚の相談とかはやめてくれよ』

決定。この親は全部知った上で面白がってたらしい。

「知ってたなら、何故教えない」

『可愛い息子から、慌てて電話があると思ったから、に決まってるじゃないか』

「心の準備つてもんがあんだよ。死ね」

それだけ言って、電話は切る。

少し言い過ぎた感もあるが、明らかに父さんが悪いだろう。

でも、まあ、言い過ぎたのは事実だし、あとで母さんにメールしとこう。

「ごめん、クソな親を問いただしてた」

彼女は思わず苦笑い。

「いや、いいよ。私のこと忘れてたみたいだし。それより名前聞いてもいい？10年前の記憶だから、間違ってたら嫌だし」

「あつ、名前まだだったのか。俺は玖珂陽斗^{くがようこ}」

彼女の表情がさきほどまでよりも、少し明るくなる。

おそらくは、昔の記憶と一緒にだったのだろう。

「じゃあ陽君、私のことは月夜って呼んでね。これから一緒に暮ら

すんだから、仲良くやらないとね」

陽君とはたぶん昔のあだ名だろうか。
まあ、呼び方なんて何でもいいけど。

「さっそくだけど陽君、私の部屋どこ？」

「あつ、案内するから付いてきて。荷物持つから貸して」

荷物を渡す月夜は妙に嬉しそうだ。
何かあったのか？

「どうしたんだ？」

「ん？だって、陽君は昔と変わらず優しいなあ、って思ってた」

俺は全く覚えてないけど、悪い気分ではないし、このままでもいいか。

「ここだよ」

案内したのは二階の部屋で、家具などはすでに備え付けてある。

「意外と綺麗に掃除されてるし、家具もいい感じ、いい趣味してるねえ」

母さんが選んで行ったので、けっして俺の趣味ではない。

「陽君の部屋は？」

「隣」

「じゃあ、覗き穴があるか確認しとかなきゃ」

「ねえよ、それに合ったとしても覗かねえよ！」

月夜って意外とボケ体質なのか？

思わず全力でツツコミを入れてしまった。

「陽君が私の体を見たくないってのは、何かショックだけど、誤解があります。私が覗くための穴です」

この子はいったい何を言っているのだ。
変態なのか？ そうなんだな。

「うん、そんな穴もないから大丈夫。でも、月夜の頭は大丈夫じゃなさそうだから、とりあえず昼食が終わったら病院に行こうか」

すでに手遅れかもしれないが、医者に診せるならなるべく早い方がいいだろう。

「冗談だよ。私がそんな変態なわけないじゃん」

冗談じゃなかったら、これからの生活について真剣に話し合わなくてはいけなかったからな。

「とりあえず、昼食にするか？」

「私もお腹減っちゃった」

とりあえずは、昼食だな。

同居人は女の子（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

ショッピング

「陽君って料理上手いねえ」

「始めたのは数ヶ月前なんだけどな」

今までは自分しか食べる人がいなかったが、誰かに食べてもらうのは、また違う楽しみがあるもんだ。

「うーん、毎日食べたいくらい美味しいよ」

「一緒に住むことになったんだし、料理ぐらい俺がやるぞ？」

「それは楽しみ。だが、しかし、料理と洗濯は私がやります。掃除は大変だから2人で」

会話の流れを完璧に無視されてしまったなあ。
けっこう扱いがめんどそうだ。
まあ、可愛いから許すけど。

「料理か洗濯のどちらかは俺がやる」

「料理はたまに作つてよ。洗濯は私がやります。陽君が私の下着を合法的見たい、って言うなら考えるけどね」

「洗濯は任せる」

返事までかなり早かったと自分で思う。

椅子に座って、拗ねたように唇を尖らせる月夜に、一瞬見惚れてし

まっ たのは内緒だ。

「ねえ、昼からはちよつと買い物行かない？」

「教科書も買わないといけないし、別にいいぞ」

月夜はやったあと喜んでいるが、数時間後に荷物持ちをさせられて
る自分を想像できた。

「意外とおつきいね」

最近リニューアルした、この辺じゃ一番大きいショッピングモール
だから当たり前だ。

「この辺じゃ一番大きいからな」

「ふん。上から見て行く、でいいよね？」

別に順番なんてどうでもいいので、適当に頷いて答える。

そして、いきなり問題発生。

最上階は映画館とゲームセンターと飲食店のみ。

最上階に着くと、全体を軽く見てまわり、ゲームセンターに入っ
ていく。

「おい、今回の目的を忘れてねえか？」

「陽君も早く来てよ。記念だから」

連れて行かれた先はプリクラだった。

「こういうのって、恋人同士で撮るもんじゃ？」

「そんなの法律で決まってるもん」

確かにそうだが、そういう問題でもない気がする。

「まあ、月夜がいいならいいけど」

「やったー」

プリクラを撮り、携帯に送られてきたプリクラを送信するために、アドレスの交換をする。

「じゃあ、次の階だな」

三階と二階は主に雑貨や洋服店なので時間がかかった。

月夜がいろいろ店を周り、気に入ったのがあれば購入で、けっこう時間がかかったのだ。

「次はどこに行くんだ？」

「ん？陽君が教科書って行ってたし、本屋さんかな」

そう、俺の本来の目的は本屋で教科書を買うこと。

このショッピングモールの本屋は、もともと教科書も扱っていたので、基本的に何でも揃うのだ。

「本屋さんってどこにあるの？」

月夜は目的もなく歩いていたので、本屋の場所も把握していなかった。

「このフロアの端っこ」

そう言って、俺が先を歩いて先導する。

「私って兄弟いなかったけど、いたらこんなに楽しいのかなあ」

「俺も一人っ子だからな、分かんねえなあ」

「ふーん、陽君ってお兄ちゃんっぽいし、お兄ちゃんって呼んであげよっか？」

思わず自分の足で躓いて転びそうになった。

同じ年だから、それは少し違う気がするんだがなあ。

「絶対嫌だ」

「えー、何で何で？こんな美少女が呼んであげようとしてるんだよ？」

「自分で言っな」

頬を膨らませて、抗議の眼差しを向けてくる月夜が、不覚にも可愛
いと思ってしまったので、スルーしておこう。

「お兄ちゃんってさあ、彼女とかいるの？」

「お兄ちゃんって呼ぶな、気持ち悪い」

嘘です。一瞬ドキッしました。

世のお兄ちゃん諸君は、こんなにも羨ましい体験を、日々してるの
かと思うと、恨めしく思ってしまったよ。

「じゃあ、陽君は彼女いるの？」

「いたらどうなるんだ？」

「彼女に誤解されないような距離感を持って接します」

「いなかったら？」

「噂になってもしょうがないの精神です」

うわあ、正直に答えるとめんどそうだなあ。

てか、噂になってもって何だよ。

「じゃあ、いるってことで」

彼女いないけど、いると思ってくれたら、学校では平和に暮らせそ
うだ。

なんたつて、こんな美少女と付き合ってるなんて噂になったら、嫉妬に狂った男子に刺されるかもしれない。

「その反応は彼女いないんだあ。でも、安心してよ。私も学校での位置付けとか、キアラとかもあるから、そんなことはしないつもりだから」

そんなこととか、噂になるような行動だろう。

キアラとか位置付けも気になるが、学校でのことは安心してことだな。

「あつ、大きい本屋さんだねえ、陽君の分の教科書も探してくるね」
「よろしく」

同じ高校で同い年だから、買い揃える教科書も同じなので、それほど手間でもないはずだ。

なので、俺は本屋の中でゆっくり読書するための、椅子と机のあるところで、ゆっくり休憩することにした。

20分程経ってから月夜が帰ってくる。

「どうだった？」

「なんかねえ、全部売り切れだったから、入荷して家に送ってくれてるって言うってた」

もう重い荷物が増えないと思うと、なんだか気持ち became 楽になった。

「じゃあ、一階で買い物して帰るか」

「そだねえ。あつ、晩御飯は私が作るからね」

「分かった分かった」

1日過ごして、何となく扱いが分かった気がする。

そして気付いた、だいたいは言う通りにさせた方が、後々楽なことに。

「夜食は私だからね」

「意味分かんし、いらない」

またも月夜が頬を膨らませる。

思春期真っ只中の男の子を、からかうのは止めてもらいたい。

「もう、陽君は釣れないなあ」

「いいから、行くぞあ」

「はい」

元気に返事する月夜と食料品を買って帰るのだった。

その日の晩御飯、月夜が作ったカレーは、今まで食べたカレーの中でダントツで美味しかったです。

負けた気分で悔しい。

ショッピング（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

入学式（前書き）

入学式は2行ですけど……。

入学式

「陽君起きなよ」

朝目覚めると、俺の竹刀を持った少女が視界に写りました。

「月夜、ちよって待ってくれ。状況を整理する」

そう、月夜と同居することになってから一週間。

せっかく教科書も買ったし勉強しよう、との気分にはなれなかった。

おかげで、モンハンでもう一つデータを作ったG級まで行っちゃったぜ。

だって、分かるだろ？

最初は男を作ったから、次は女のデータを作ってみたって。

ようはそれ。

そして、この一週間は最低限の生活以外は、月夜とひたすらモンハンに励んでいた。

って、今はそんなの関係ない。

目の前で竹刀を持った月夜についてた。

よし、夢だ。

そういう設定にしておこう。

「夢の中の月夜も可愛いぞ」

「えっ、そう?」

顔を真つ赤にしてモジモジしている。
これは、俺の勝利じゃないのか?

「さあ、夢なら早く覚めてくれ」

手を広げて天を仰ぐ。
実際は天井なのだが。

「馬鹿なことやってないで、朝ご飯できたから顔洗ってきてよ」

さっきまで馬鹿みたいな反応をしていたのは誰だ!と言ってやりた
いが、竹刀が怖いので言いません、はい。

「今、行く」

洗面所に直行して、冷水を顔に。

「死にそう」

蛇口を捻ってすぐの水は、予想以上に冷たかった。

暑いのも寒いのも嫌い。

冬服から夏服への移行期間ぐらいがちょうどいいよね。
な俺には、朝一の冷水は身に染みるものがある。

「あっ、やっと来た」

食卓に並べられているのは

ご飯、味噌汁、焼き魚、漬け物、リンゴ半分だった。

なんとも栄養バランスを考えた食事。

「朝から健康に気をつかってるな」

「逆に朝だから、って考え方もありだね」

まあ、どっちでもいい。

「今日は入学式だね」

「？そういえば、そうだったな」

朝から起こしにきた理由はこれか。

入学式は10時からだが、9時からクラス掲示と簡単なHRがあるらしいのだ。

「一緒に行こっか」

「別にいいけど」

一緒に行ったからって、何かが減るもんじゃない。

それに、俺には中学からの友達がいるが、月夜にはいないしな。

「やった」

小さくガッツポーズを決めているが、そんなに嬉しかったのだろうか。

まあ、知り合いと一緒にの方が、心強いのは分からなくもないが。

「じゃあ、8時20分に出よ」

「まあ、そんなもんだな」

俺達を通う私立青葉高校は、家から徒歩15分と、それなりに近いのだ。

「じゃあ、食べた食器は流しにお願いね」

「りょーかい」

もう、一日三回を一週間も言われ続けたら、誰でも分かる。

「んじゃ、俺は着替えて、歯磨いてくるから」

そういつて、着替えて洗面所に向かう。

「じゃあ、後はやつとくから、月夜も歯磨いて、準備して来いよ」

「うん。ありがとう」

もう、月夜が洗い終えてしまい、後は拭いて食器棚にしまうだけ。

それも終わったところに、月夜も終わっていて準備は完了。

ここで時計の確認。

「……8時」

言いようのない感情がこみ上げてくる。

いつもなら、この時間に出ればいい。

だが、入学式はいつもより遅いから、早く用意する必要はないのだ。
よって、残った中途半端な時間の使い方は困ってしまう。

「テレビでも点けよっと」

これは絶対に死亡フラグだな。

テレビを点けて、20分に出れるわけがない。

「なぬっ！？ラスカル……だと」

そう、テレビでやってたのは、世界名作劇場だ。
NARUTOが何故入らない？

と聞きたいが、完結してないからと、自分を無理矢理に納得させている。

世界名作劇場、しかもラスカルなど、見るなと言う方が無理な話だ。

そして、時は進み8時半。

エンディングまでバッチリ見ていると、予定時間を過ぎてしまった。

それでも余裕が充分あるが、何となく負けた気がする。

いや、ラスカルが悪い。

小学校の先生が教室に、ラスカルのぬいぐるみを置いていたが、一年経たずに殉職したからなあ。

「陽君、早く行こ！」

「分かってるつて。そんなに焦らなくても余裕だぞ」

まあ、入学式なんてイベントだし、興奮する気持ちも分からなくはないが。

「今日と言う日に、一年が掛かっていると云っても過言じゃないんだから」

いやいや、過言だろ。

クラス発表って、そこまで重大なイベントか？

「陽君と同じクラスになったらどうしよう。……キャー」

月夜は顔を赤くし、手を頬に当てながら騒いでいる。

「重症だな。いつそ安楽死させた方がいいかもな」

「ひどい！それでも未来の旦那なの？」

頬を膨らませた月夜は、何か小動物みたいで可愛い。

イジメたくなっちゃう感じだな。

だが、聞き流せない単語も含まれていたが。

「なつた覚えはない」

「じゃあ、未来のご主人様」

「月夜が言つと、卑猥に聞こえるから止めてくれ」

「卑猥じゃない『ご主人様』を教えてほしいぐらいだよ」

ため息を付きながら月夜は言ってるが、そろそろめんどくさくなってきた。

「じゃあ、俺先に行くわ」

月夜の方は見ずに、玄関に直行する。

「うそつそ、置いてかないでえ」

月夜が半泣きになりながら追いかけてくる。

お前は子供か！

そして、無事に学校に到着。

人が多いので月夜とははぐれてしまったが、家で会えるだろうと無

視を結構中。

とりあえず、クラスを確認しておく。

「……C組か」

他の名前は、教室に行っただけのお楽しみ、ってことで確認していない。

「陽斗」

後ろから声をかけられたので振り向いて確認する。
いや、親友の声なのは分かっていたので、確認するまでもないが。

「修は何組？」

声をかけてきたのは、立花修。

高校からはバイト戦士になると意気込んでいる、中性的な顔の親友だ。

修と遊びに行くと、必ずナンパされてるからネタだ。
それも男に。

「僕はC組です」

「俺もC組だから、一緒に行こうぜ」

うん。と頷いて修が後ろに付いてくる。

教室までは案内掲示があっただけで楽に着いた。

「やっぱり知らない人もたくさんですね」

「そうだな」

ザッと見た感じだと、知ってる奴は10人ほど。
喋る奴と言えば、親友の修ぐらいしかない。

まあ、入ったばかりはこんなもんか。

「俺の席は…後ろから2番目か。なかなかいい感じだな」

「僕は右隣です」

名前の順だと、意外と近くなるもんだ。

それからしばらく、俺の席で修と喋る。

春休みのことなどを喋っているが、従兄妹が居候してることしか伝えていない。

だってねえ、何かからかわれそうだし。

ドンッ

後頭部に鈍い衝撃が伝わる。

急いで後ろを振り向くと、鬼のような形相の月夜がいた。

「……どうしたんだ？」

「陽君に置いてかれた。私を置いて陽君は浮気してた」

あー

最初は何のことが分からなかったが、全て理解した。

修が女顔だから、女子と間違えたのか。

いや、でも浮気はないぞ。

月夜と付き合ってるわけではないし、そんな予定もないのに、浮気なんてあるはずがない。

「陽斗、彼女？」

「違う」

「違います」

ニヤニヤしながら修は言っていたが、月夜と揃って同時に否定する。

「妻です」

教室が静寂に包まれる。

そりゃ、入学式当日に人を鞆で殴ったら、一瞬でも注目を集める。

さらに続いての浮気発言で、クラスの目は釘付けだったのだ。

そこに、月夜は最後の爆弾を投下し、止めをさしたのだ。

「陽斗、結婚してたんですね」

この親友は悪ノリが過ぎる気がする。

「んなわけねえだろ。月夜も冗談はやめろ」

「テヘツ」

舌を出す仕草は可愛い。

それは認めるが、月夜も悪ノリが過ぎるようだ。

「まあ、冗談です。それで陽君、そちらの可愛い方とは、どのような関係で？」

俺と修はお互いに顔を見合わせて苦笑い。

そして両方が思う。

ああ、いつもの勘違いか。

女の子に見られがちな修はもう馴れたもんだが、まさか俺の彼女だと思われるとはな。

「こいつは親友の立花修。見て分からないかもしれないが、男だ」

「よろしく」

男だと聞いて、月夜は固まってしまった。

そして、それが解けると一言。

「人体の神秘ね」

俺もそう思うが、たぶん違うぞ。

「月夜の席はどこなんだ？」

「後ろ」

後ろとは、俺の後ろって意味だろうか。

まあ、確かに『玖珂^{くが}』と『久喜^{くき}』なら前後になるな。

絶対に授業中に何かしてきそうだ。

初老の担任の挨拶も終わり、体育館に移動。

異常に長い校長の話を聞いて、入学式は終了。

その後も教室に戻り、簡単に自己紹介をして終了と言う、クラスを見に来ただけの一日だった。

帰りに修に

「もう陽斗は魔法使いになれる資格は失ったのですか？」
と聞かれたので、殴っておいた。
絶対にあるわけがない。

何故、魔法使いなのかと言うと、アレですよ。
ネットの都市伝説です。

月夜も最初は分からなさそうだったので、教えず、調べさせずにさせておいた。

これからの高校生活は、月夜がいたら、何故か退屈しなさそうだ。

入学式（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

夢（前書き）

この作品にとって大事な伏線を張った回ですね。

夢

「陽君ってさあ、学食派、それともお弁当派？」

「俺は時間があれば弁当派だけど」

朝食後に月夜がもじもじしている。

なんか怖いから止めてもらいたいのだが……。

「じゃあさあ陽君。お弁当作ってあげよっか？」

「どっちでもいい」

つくよが頬を膨らませたのが、よく分かる。

「なら、私の作ったお弁当のあまりの美味しさに驚くといいよ」

いや、いつも作ってる飯と何か変わるのだろうか。

弁当だけ格段に美味くなるなら、是非とも普段の生活でも実用してもらいたいもんだ。

「今日は無理だろうから明日から楽しみにしとくわ」

月夜がニヤニヤと笑っているが、こういう顔をする奴はいい奴がないと、俺の人生経験が告げている。

何か企んでるにちがいない。

「ちなみに中身は全部おはぎだよ」

「何故にそのチョイス!？」

反射的に返してしまったが、たぶん冗談だろう。
いや、冗談であってほしい。

おはぎは好きだが、弁当となるとねえ。

「冗談だつて、さすがにおはぎは入れないよお」

「だよな。そうでなかったら焦る」

「でも、何が入ってるかはお楽しみだよお？」

うつわあ、凄く不安になる要素だけ残しやがったよ。

「グロイ系はやめてくれよな？」

「それは態度次第です」

不安要素だけを残して、この日は学校に行く。

「あれ、陽斗は学食なんですな」

「今日はな。寝坊しちまったから」

起きた時には、弁当を作る時間が過ぎていたのは本当だしな。

「なら、僕も弁当を食堂に持って行って食べます」

「私も学食。初めての学食」

修と月夜も学食参加が決定。

まあ、月夜の方は知ってたが。

「あたしも付いてっていい？」

こげ茶がかった少女がいた。

中学の時は女子バスケットに入っていて、その影響かスラリとした体型、ショートヘアの活動的スタイル。

そして例のごとく美人系。残念なのは胸のあたりか……。

いや、これはこれで需要があるのかもしれないが。

「どこ見てんのよ!」

どうやら、無い乳のことはシークレットだったらしい。

「いや、彩がこのクラスって知らなくて」

「あんたの右斜め後ろにずっといたでしょうが!」

いや、いたか?

昨日の入学式はいなかった気がするんだがなあ……。

「昨日もいたか？」

「昨日は行く意味感じなかったから、休んでたのよ」

「さいですか」

どうやら、俺と月夜と修は休みたいと思いつつ来てしまう人、彩は

一歩踏み出す勇気を持っていて堂々と休める人。
俺たちとは少し思いつきりが違うなあ。

「なら知らん。俺はずっと寝てたからな」

「僕は少し喋りましたけど、陽斗が声かけられるのかと思ってましたよ」
俺は一時間目から四時間目までは、基本的に寝てるので周囲が把握できていなかったらしい。

「ねえ陽君、この子誰？彼女？」

昨日に引き続き月夜が、意味の分からないことを言っている。
スルーしたいが、したら何かされそうだなあ。

「こいつは戸川彩。中学からの友達だ」

「彩って呼んでねえ」

「よろしくあやや、私は月夜でいいよ。ちなみに陽君の従兄妹で妻だから。でも、略奪愛は上等だよ？敵は多い方が燃えるからね」

彩の言ってること無視して、変なあだ名付けるし、変なこと言ってるしで、とりあえずツツコミどころが満載だな。

「うん、あたしは陽斗君が好きなわけじゃないから大丈夫」

本人の前で言われるとけっこう傷つくものがあるな。
彩の好きな人は知ってるけどさあ、修だって知ってるけどさあ、もうちょっとオブラートに包んでほしかったですよ、はい。

「なら安心。じゃあ、あややも行こうよお」

月夜が右手で俺の手を左手で彩の手を取って進みだす。
修は苦笑いを浮かべながらも付いてくる。

そして、食堂までの廊下。

ずっと見られた。もう凄い勢いで。

まず、ガン見するか、二度見するかの反応だった。

だってねえ、修は中性的なイケメンだし、月夜はかわいい系、彩は美人系。

そんな3人と普通な人の俺ですよ？

女子や男子からの嫉妬の視線が痛いです。

「お前らみたいな人生勝ち組と歩いてるとイライラしてきた」

「いたっ、……痛いって」

ム力ついたので、修のこめかみの辺りをぐりぐりしといた。

「陽斗は中学の時からそう言いますが、みんなが見てるのは陽斗ですよ？」

うん、確かに嫉妬の視線は中学の時からずっと感じてましたよ。

「お前らといると嫉妬の視線に殺されそうなんだぞ！」

修があからさまにため息を吐く。

いつたいたんだというんだ。

「陽斗って今まで何回ぐらい告白されたか覚えてます?」

「友達としてならけっこうあるけどなあ」

「陽斗に告白した人たちが可哀想です」

そんなに言う必要があるだろうか。

友達としての告白なんだから、別に可哀想でも何でもないだろうに。

「僕が知ってる限りでも、陽斗に中学時代に告白してる人は、上級生、下級生問わず40人〜50人はいました」

「陽斗ってそんなにモテてたんだ!妻としては心配です」

俺の知らない新事実。あれは友達宣言じゃなかったのか……。てか、月夜の言ってる意味が理解できない。

「まあ、いいや。終わったことだし」

またも修がため息+苦笑いを浮かべる。

ちなみに食堂で食べたのはカツ丼だった。

だってねえ、なんか近くの席で食べてる人のが美味しそうだったんだもん。

その日の5時間目と6時間目も無論寝てた。
一日何時間寝るんだよってぐらいに寝てた。
そして、夢を見た。

「……………、ぼくたちが、おつきくなったら、あけるんだよ?」

「よくんも、わすれたりしちゃダメだよ?」

少女と言うよりもたぶん幼女が話しかけてくる。
だが、夢の中の記憶は曖昧で、彼女の顔と名前が思い浮かばない。
そこだけ、虫食いにあったかのように、真っ黒な世界に塗り潰されているのだ。

「これをあけるときは、ぼくたちがおつきになったとき。そのとき
までは、あけないやくそく」

「このなかのことも、やくそくだよ?」

「うん!」

最後は俺の元気な返事。

箱を埋めたのまでは分かったが、どこに誰と埋めたのかまでは思い
出せない。

「陽君、起きなよ。帰るよ?」

目の前には月夜の顔。

周りには修と彩がいる。

どうやら眠っている間に、他のクラスメイトは帰ったらしい。

「いい夢見れたの？」

「そう見えるか？」

自分ではどんな顔をしてるのかまでは分からない。

「なんか嬉しそう…かな？」

「まあ、月夜がそう思っんなら、そうなんじゃね」

俺は久々にこの夢を見たのだ。嬉しくないはずがない。
だって、夢の中の彼女は俺の初恋の人なのだから。

今はどこで何をしてるのかも分からない。

でも、大きくなったその日には、必ず会えると信じてる。

夢（後書き）

この先の展開はおおまかには頭の中にあるが、長く続けることも短くすることもできてしまう。
さて、どうしよう。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

お弁当

「あつ、陽君おはよー」

学校のある生活に、早くも適応したので、今日は月夜に起こされるまでもなく、自分で起きた。

「おはよう。？弁当？」

朝食はすでに準備されていて、月夜は弁当の準備をしていた。

「そうだよお。陽君のは詰め終わって、私のを詰めたら完成だよ」

俺の弁当箱らしきものは、すでにケースに入っていた。

月夜の詰めかけの弁当箱を見る限り、今日の昼はかなり期待できそうなのがする。

「はい完成。じゃあ、朝ご飯も食べちゃおっか」

そう言つて、2人で食べ共同で片付けを終わらせる。

そして、待ちに待った昼休み。
つまり、昼食の時間。

席は俺と修が席をくつつけて、月夜と彩が椅子を持ってきている。

彩は修のすぐ近くに座れて嬉しそうだ。
なんか、かなりドキドキしてるのか、甘い空気がこちらにまで流れてくる。

とりあえず、お約束なので言っておこう。

「リア充、爆発しろ」

まあ、修と彩は付き合っていないのだが、こういうのは、周りがどう感じるかが重要だと思うわけですよ、俺としては。

「じゃあ、食べよっか」

そう言って、月夜が開けた弁当はかなり美味しそうだ。
未完成の段階から思ってたが、完成品は尚凄い。

「さあ、陽君も早く開けなよ」

俺も弁当箱に手をかけ……

あつ、俺と月夜の弁当って同じじゃね？

修は知ってるけど、彩は知らない。

俺がここで弁当を披露すると、絶賛誤解されると言うイベントが待っている。

そこで、月夜の顔を確認する。

「どうしたの？」

かなりニヤニヤしていた。

確信犯キターーーー！

噂になっても、月夜には何もメリットは無さそうなのに、何故こんな手のこんだことをするのだろう。

「陽斗、大丈夫ですか？」

「陽斗君、なんか凄い汗かいてるよ？」

気が付いたら、冷や汗をダラダラ流していた。

それにしても、ここまで心配してくれるとは、友人に恵まれてるな。従兄妹には恵まれなかったみたいだが。

「陽君、大丈夫だよ。陽君が心配してるようなことは、起きないから」

月夜が安心させるように言う。

今はこの笑顔が天使のようです。

さっきのニヤニヤが気になるが、今の心配が無くなったのなら、大丈夫だろう。

そう思い、弁当箱の蓋を開けて……

言葉を失った……

「なんだ……これ？」

弁当を開けると、そこは、安倍川餅になっていた……。

弁当を開けると、一面が黄粉のよく分からない色で一色だったのだ。

「陽君って甘党だったんだあ」

わざとらしく月夜が言う。

その顔は、イタズラが成功した子供のような顔をしていた。

修は事情を分かってるからか、同情の目で見つめながら、溜め息を吐いた。

彩は目をパチパチさせている。
言葉も失ったつばい。

「あー、月夜は俺の弁当が、こんなになってる理由知らない？」

「私にも分からないよお。もしかしたら、モテまくりな陽君に嫉妬した誰かがやったんじゃない？」

2人ともわざとらしく話し、修は尚も苦笑い。

「まあ、いいや」

安倍川餅の一つを口に運ぶ。

「うめえー」

素直に感想が漏れた。

はつきり言って、予想の二段階ほど上の美味さだった。

そして、その日の学校も無事に終わり、放課後へと突入する。

「おい月夜、アレは何だったんだ？」

「アレって何のこと？」

分かっているだろ。オイ、コラ、白状しろや。証拠は拳がつてんだよ。みたいな目を向けると、『あー』と、納得したような声を出す。

「安倍川餅はね、私が好きだから入れたの。私も陽君と同じにしよ
うと思ったけど、カロリーがね」

苦笑いして、お腹をさすりながら言う。

「じゃあ、安倍川餅が好きなら、月夜があんまり好きじゃないもの
入れてくれ」

これなら、普通の弁当になる気がする。

ん？普通のにしてくれで良かったんじゃない……、まっいつか。

そして、次の日。

「陽斗って、和菓子が好きって設定あったっけ？」

「陽斗君はカロリーを気にしない。ある意味で勇者だね」

ご心配ありがとうございます。

俺も自分のカロリーが心配になってきました。

「なあ月夜」

「なあに？」

「何で、俺の弁当がおはぎだけなのかって分かるか？」

犯人なんだから、月夜に聞くのが一番早い。

「それはねえ、陽君が昨日、『あんまり好きじゃないもの』を、入
れろって言ったからだと思うよお」

まさか、あの時の会話の意味はこれだったのか……。

月夜はたしか、『さすがにおはぎは入れない』と言っていた。

まさか、その意味することが、『おはぎはあんまり好きじゃないから入れない』ってことだったのだ。

普通は弁当におはぎは可笑しい。

ではなく、好き嫌いの問題だった。

まさかの展開だ。

今後は月夜の言動にも、注意しないとイケないかもしれない。

ちなみに、おはぎは美味しかった。

だが、口の中が甘々になり、水が無かったらヤバかったかもしれないが。

「月夜、明日からは俺と同じ弁当で頼む」

「ん？そっちの方が楽し、いいよお」

何とも気の抜ける対応だ。

二日も悩んでいた自分が、馬鹿らしく感じてきた。

これで、弁当問題は解決！

と思っていた。

俺は

月夜のネタ弁当を食べるか

月夜と同じ中身の弁当を食べる。

その二つしか選択肢を考えてなかったが、今はまだ気付かなかった。

両方の選択肢がハズレだったとは……。

お弁当（後書き）

誤字・脱字。質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

好きな人

今は昼休み。つまり弁当の時間だ。

そして、今日もいつも通りの4人で食べる。

例のごとく。弁当の蓋を持ったところで、いろいろなことが頭を巡る。

これって……開けたら、月夜と同じ中身なんじゃね？

弁当初日の疑問が、再び持ち上がる。

「どうしたの？陽君」

月夜が期待に目を輝かせている。

だが、ここで蓋を開けてしまえば、俺と月夜が付き合ってるのでは？などの噂になっても困る。

てか、月夜はそれでいいのか？

いや、一緒に住んで分かったが、月夜は俺が驚いたり慌てたりするのを楽しむ、快樂主義者のような奴なのでは？と言う疑問があがっているのだ。このぐらいは気にしないのかもしれない。

「あ、ああ」

月夜に生返事を返し、一思いに蓋を開ける。

中身は月夜と同じ。だが、少し俺の方が量が多いくらいだった。

「あーっ、陽斗君と月夜ちゃんの弁当の中身一緒だあ。ねえねえ、もしかして二人ってそういう関係？」

そう、こうなるのが分かってたから嫌だったんだ。

彩は自分の恋愛話をされるのは嫌なくせに、人の恋愛話にはかなり積極的だ。

普通はそんな人間は嫌われそうな気もするが、彩に限って言えばそんなことは全くない。

それも彩の人徳の成せることなのかもしれない。

「違う」

俺の否定に、彩はつまらなさそうに興奮を静める。

だが、そんな俺の反応とは逆に、月夜は顔を耳まで真っ赤にさせている。

「じゃあ、陽斗君と月夜ちゃんの弁当が、一緒なのって偶然？」

偶然ではなく必然なのだが、この場合はどう言ったら上手く回避できるのだろうか。

そんな考えをしているうちに、月夜が真っ赤になりながら呟く。

「私が陽君に作ったから。従兄妹だしね」

ナイス月夜。なかなかいい返しだった。

これなら彩だつて分かつて――

「ふーん。でも、従兄妹でも普通そんなことしないんじゃない？」

――くれなかつたみたいです。

「月夜は俺ん家に下宿してるからな」

彩は両親の海外転勤の話を知らない。
なら、これで特に問題はないはずだ。

「そうなんだあ。じゃあ、月夜ちゃん、陽斗君に襲われそうになったら殺してでも拒否するんだよ？」

「襲わねえよ！」

「襲つてくれないの？」

「何でお前のリアクションがそうなんだよ！」

上目遣いの月夜は可愛い。

だが、従兄妹でも越えては行けない一線、ってあると思うわけですよ。

そんなことになったら、この先の同居生活がどれだけ気まずいことになるか。

「陽斗には好きな子いますしね」

修よ、この場面でのその爆弾は投下しちゃダメだろ。

「陽斗君、だれだれ？あたしの知ってる子？」

「陽君、浮気ダメ、絶対」

彩はテンプレートな聞き方で聞いてくる。

正直に言っと、その問い詰めようとする顔が怖いです。

月夜はよく分からない。

言葉のキャッチボールができるのかも怪しくなってきた。

「お前らの知らん奴だ。言っても分からんし、言う必要はなし」

「陽君、信じてたのに……」

月夜が涙目の上目遣いで見上げてくるが、今回はかりは言いたくない。

なんかからかわれそうだし。

「修が余計なこと言うからだ」

「ごめんごめん。後でジュースおごりますから」

「しゃーねえな」

別に何か貰いたかったわけではないが、貰えると言っのなら貰っておこう。

「陽君、その話は後でたっぷり聞かせてもらいます」

「黙秘権を使います」

「晩御飯とどっちが大切か、よく考えといてね」

晩飯抜きでも死にはしないが、お腹は空く。

さて、どうしたもんか。

まあ、俺の恋の話なんて聞いても何もおもしろくないんだけどなあ。

「はいはい」

そして、放課後。

「陽君の好きな人が誰なのか、聞かせてよ」

もう、言及回数が多すぎて正直に言つと、言ってしまった方がマシかもしれない。

「まあ、いいけど面白い話じゃねえぞ？」

月夜は目を輝かせている。

だから、期待しないでほしい。

「俺は10年ぐらい前から、ずっと好きな人がいるんだよ。初恋だったんだが、もう顔も名前も思い出せねえ」

そつ、こないだの夢に出てきたあの子。

どこにかは覚えていないが、一緒にどこかに何かを埋めた子。

その子は今どうしてるだろうか。

ほとんど覚えていないのだが、好きだった気持ちだけは何故が残っている。

あの子にもう一度会いたい。

会って何を話せばいいかなんて分からない。

それに、彼女が俺のことを覚えているかは分からない。

もし、もう一度、彼女に会えたら、小さい時に交わした、未来の約束を守ることが出来るのだろうか。

それもこれも会ってみないと分からない。

それに、俺も思い出さないと本人かも分からない。

「ちゃんと思い出せるといいね」

そう言った、月夜の顔は少し悲しさを感じられる笑顔だった。

「そうだな」

彼女を見つけたら、俺は何て声をかけるんだろうな。

思い出せてもないのに、名前を呼ぶんだろうか。

まあ、そんなことはその時の自分に任せればいいか。

「じゃあ、言ったんだから、俺の分の飯はあるんだろうな」

「ふえっ！、もともと陽君の晩御飯の用意もするつもりだったよ？」

さっきまでのことは何だったんだ。

分かってたら、こんな恥ずかしいこと言わなかったのに。

まあ、月夜も今はスッキリした顔になったしいいか。

好きな人（後書き）

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

告白

「好きです。付き合ってください！」

今、俺がいるのは屋上。

そして、目の前には廊下で、何度かすれ違ったような気がする女子。

『気がする』と言うのは、喋ったこともないし、どっかで見たことがあるかも、ぐらいにしか覚えていないからだ。

「あー、えーっと」

俺がどう対応しようか悩んでいると、少女は上目遣いで見上げてくる。

「ダメ...でしょうか？」

ヤバイ。今のは何という突破力。危うくOKしかけた。

「あつ、ごめん。俺、好きじゃない人とは付き合えない」

きっぱりと言う。

だって、相手の気持ちと自分の気持ちが釣り合わない。

そんな状態だと、付き合ってるのではなく、片方からすれば、付き合ってもらってる。と言った状態だと思う。そんな気持ちで付き合

うのは、失礼だと思ったのだ。

だから、多少はきつい言い方だとしても、言わないといけなかったのだ。

「そう…ですよね」

涙を目に溜め、無理矢理にでも作った笑顔で答える少女を見ると、罪悪感を感じてしまう。

「ふう」

少女が屋上から見えなくなったところになって、緊張の糸が切れたのか、その場に座り込んでしまう。

「陽斗は相変わらずの人気っぷりですね」

「陽斗君モテすぎて気持ち悪い」

「いや、修の方がモテてるだろ。あと、彩、お前に気持ち悪いと言われる筋合いはない」

修に実はモテると聞いて以来、友達宣言だと思っていた告白が、全てアノ告白だと知ってしまった。

そうなると考えてしまうのが、中学時代の俺がかなり失礼な人間だったと言ったこと。

「陽君はモテすぎるので、妻としては心配です」

「うん、結婚した覚えがないのに、それだけ妄想を語れるのは一種の病気だ。悪いことは言わねえから、早退して病院言ってこい」

いつもいつも、俺をからかって月夜は楽しいのだろうか。

「陽斗、もう今週何回目？」

告白されるのが何回目と言う意味なのだろう。

そう、入学して一ヶ月が経っているからか、突然告白されるのが多くなったのだ。

「今週はたぶん3回目だな」

「私も3回です。陽君は私が告白されるとどう思いますか？」

返事によつては地雷だと瞬時に理解した。

これは、あれだ。『嫌だ』とか答えると、家で気まづくなるパターンだな。

「早く付き合っちゃえよ。って思った」

月夜の顔がニコニコしている。だが、目が決して笑っていない。

ヤバイ、殺られる。

「陽君はどうして付き合わないの？」

「好きでもないのに付き合うのは失礼だと思ったからです」

「なら、好きな人は？」

「この前話したとおりです」

あまりの恐怖に、敬語で話してしまっている。

修は『言っただんですね』とか言ってるが、言わせたのはお前だ。

「そういえば私もね、初恋って大事だと思うんだあ」

「ソウデスネ」

思わず片言。絶対的な恐怖を前にキャラの一貫性が無くなってしまった。

「私もね、初恋の人以外と付き合う気はないんだあ」

「はいはい、そうですか。素敵な話ですね」

なんか、どうしてもよくなってきたので、適当な返し。

まあ、普段結婚的なことを言ってるのは、やっぱりからかってただな。

だって、付き合う系のは出てきたことねえし。

「ところで修は何回告られたんだ？」

「僕は図書室で一回です」

うわあ、修ってなんか図書室めっちゃ似合うわあ。

たぶん、相手は図書委員とか常連なんだな。

「彩は？」

「0回」

あつ、こっちにも地雷が潜んでいやがったのか。

回避行動取れずに、直撃しちゃったじゃねえかよ。

ここは、何か気の利いたフォローをしなくては……。

「彩って、どちらかと言うと男友達だもんな」

言ってしまった後に大いに後悔した。

これは地雷なんてもんじゃない。

傷痕弾だ。これは無傷では帰れそうもないな。

「そうですか？僕は明るくて、元気があって、楽しそうで可愛いと思いますよ？」

おう、修よ、ここに来て俺を救済してくれるのか。

だが、一つつつこむ。可愛い以外の3つはどのような違いがあるんだ？言いたいことは全部同じ気がするんだが。

「修君がそういうなら、そうなのね」

真っ赤な顔で俯いている彩は可愛かった。

まあ、言ったのが修じゃなかったら、ここまでにはならなかっただろう。

自宅にて

「陽君ってさあ、初恋の人に会えたらどうするの？」

「顔とか覚えてないから、会えたか分かんねえからな」

そう、結局の問題はそこにたどり着いてしまうのだ。

「ふーん、じゃあ、思い出すまでは誰とも付き合わないの？」

「まあ、そうなんじゃね」

「じゃあさ……」

月夜は黙り込んでタイミングをうかがう。

「……大人になったら、って約束があったら、何歳になったら大人になったって判断する？」

夢の中の子と何かを埋めた時も、『大人になったら』って約束だっ

たと思う。

「普通は20歳からだろうけど、俺の中では、一生大切にしたい人ができたら……かな」

少し月夜は俯き気味に話す。

「……陽君は、その初恋の人のことを、一生大切にしたいって思う？」

「どうだろうな。会ってみないと分かんね」

昔は昔で今は今。今をつくるために昔がある。だが、俺の中での昔と今の彼女の間に流れた年月で、彼女がどう変わったのかは分からない。

なら、会ってみないと分からないのだ。

「だよ。それに……陽君の初恋が私と会う前かもしれないし、会った後かもしれないしね」

「ん？最後の方聞こえなかったんだが」

『それに』の後が聞こえなかったが、何て言ったのだろうか。

「何でもないよ。ただ、私ならいいなって話」

何が？って聞こうと思ったが、月夜はキッチンに小走りで駆けていってしまった。

「はあ」

何か最近、こつこつ話ばっかだな。

告白（後書き）

さて、何話で終わらせましょうか。

長くすることも短くすることもできるしなあ。

完結までは書きたいから、無理矢理にでも持っていくけど、どうしよう。

ってことで

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

ゴールデンウィーク

「さて、陽君、今日はゴールデンウィークの一日目だよ。ってことで、どこか行こ？」

この質問に対する答えは決まっている。もはや、俺の中では一択だ。

「寝る。以上」

「私はクラスの男の子から遊びに誘われてます。さて、どうする？」

俺に何て答えさせたいのか、全く分からないのですが。

「せっかく誘ってくれたんだし、行ってくればいいじゃないか」

月夜の頬を膨らませて拗ねている。
選択肢をミスったっばいぞ。

「じゃあ、質問を変えるね。ここにクラスの子に水族館に行こうと誘われて、2枚のチケットがあります」

何故に2枚持っているんだ。誘われたなら、普通は1枚だろ。

「ってことで一緒に行こ」

どうしたものか。

別に暇だし水族館は嫌いじゃないから、行ってもいいんだが、何か

なあ。

「一つ聞くんが、何故2枚チケットを持ってるんだ？」

「ふえっ？そんなのクラスの清水君と吉村君が誘ってきた時に、一方的に日時と場所だけ言ってチケット置いてったからだよ？」

しみず「ー、よしむらー、お前ら、もしかしたらって思ってたが、やっぱりそうだったのか。」

だが、誘うんなら相手の返事も聞いとけよ！

「なら、その二人と行くもんじゃないのか？」

「行くって言ってないし、行く気ないもん」

南無。お前らのことは忘れない。

「じゃあ、チケットだけでも返してこいよ」

「ええー、嫌^やだよお」

子供か！って思ったが、可愛いから許す！

「じゃあ、俺がチケット買ってやるから」

あつ、今のミスって言っても聞かないんだろうな。

なんか目をキラキラさせて、見上げてきてるし、この状況ではさすがに断れない。

「それでいい。むしろ、それがいい。行くのは明後日だからね」

よし、無駄な出費は嫌なので、やっぱり清水と吉村のチケットをしよう。

あいつらには悪いが、俺の財産を消費するよりはマシだ。

「駅前に9時ね」

返事を聞かずに月夜は自分の部屋にこもってしまった。
たぶん、服を決めてるのだろうか。

「まっ、一日ぐらいいつか」

家に5日もいたら、連休明けに学校行く気無くなるだろうし。

そして、次の日。

「早く来てしまった」

8時半に駅前の噴水前についてしまった。

家と一緒にんだから、一緒に出ればいいと言ったのだが、本人曰く『この方がデートっぽいじゃん』とのことで、わざわざ駅前で合流することになった。

ちなみに月夜は『女の子は準備に時間がかかるもの』とか言っていたので、俺が先に家を出た。

「暑くないし、寒くもないけど、暇で死ぬ」

30分も1人でどうしろと。

「ねえねえ、そこのお兄さん」

目の前にケバイ女の子が二人いた。
しかも、はっきり言って香水臭い。

「人違いです」

「いやいや人違いじゃなくてさあ」

「人違いです」

もう、相手するのめんどくさい。
てか、早くどっか行けよ。

「暇ならあたし達とどっか遊びに行かない？」

「人違いです」

言っと思うが、さすがに今の質問からの返しは無理があったと思う。

「お兄さんカッコイイからどっか遊びに行こうよ」

絡みうぜえ。とりあえず殴りたいなあ。

「とりあえず、俺に話しかけんのやめてくんね？人待ってるし」

正直に言ったが、これで引き下がらなかったら、もはや救いようないクスだな。

「なら、その人も入れて、ちょうど2対2ってことでいいじゃん」

話通じてんのか？もはや、何話しても無駄な気もしてきたんだが。

「お前ら日本語分かってんのか？義務教育終わってからにしてくんね？」

俺もバカだが、こっちは救えないバカだな。

「もしかして、お兄さんツンデレ？」

どうしたら、その結論に行くのか、思考回路を順を追って見てみたいものだ。

「デレてねえよ！それに——」

あつ、やべ、続き何言つか考えてなかった。

「——それに、俺はロリコンだぁー」

うわぁ、言った自分に引くわぁ。

視線の先に幼女がいたから、とっさに出たが、こえはまずい。

あつ、そこのおばさん、自分の子供が幼女だからって、俺から隠すようにするのやめてくれませんか

？

精神的にかなりきついんですけど。

てか、さっきから周りの視線が痛い。

「お兄さん、おもしろーい。やっぱり、あたし達と遊びに行こうよ
こいつらはどんだけしつこくなれば気が済むんだ。

「陽君！」

少し離れた場所から、聞きなれた声が……。

「あつ、月夜、おせえぞ」

まだ待ち合わせ時間まで余裕はあるが、俺の精神の体感時間は3時間ほど経っていたのだ。

「ごめんねえ。それで、その人達は？」

「知らねえ」

もはや知りたくもねえ。

「ちょっと、あんた誰？お兄さんはあたし達と遊ぶんだから邪魔するな」

月夜が俺の方を見てくるので、とりあえず首を横に振る。

「陽君、行く気ないみたいですけど」

月夜の今の状況を説明するなら、静かに怒っているっぽい。
ケバイ女の子×2は月夜の発言に、少しひるんでいる。
いいぞー、やっちませ！

「あんたは、そこのお兄さんの何？」

従兄妹、同級生、同居人、まあこの辺りだな。同居人と言うのはま
ずいと思うが。

「私は陽君の彼女兼婚約者」

月夜の発言に転びそうになってしまった。

もはや、どれも当てはまっていないが、ここで指摘するとケバイの
が何か言ってきたそうだな。

「そんなわけで、俺が言ってた待ったる人って、こいつだから」

月夜の肩を抱き、そのまま駅の方へと向かう。

その光景をケバイのはただ見るだけだった。

「……陽君が彼女も婚約者も認めてくれたよお」

月夜は顔を真っ赤にして、呟いてるが、何か反応した方がいいのだ
ろうか。

ゴールデンウィーク（後書き）

次は水族館の話ですが、明日はセンター試験なので、更新しないかもです。

誤字・脱字・質問があれば感想欄までお願いします。
評価、感想、お気に入り登録よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3655ba/>

未来の約束

2012年1月13日16時50分発行